犬にみられる母子相互作用の考察

馬場一雄（日大小児科）
森永良子（伊豆逓信病院小児リハビリテーション科）
上村菊朗（　　〃　　）
佐藤能成（動物実験室）
岡野恒也（日本女子大）

犬は，「ひと」との生活の歴史が長く，信頼関係が成立すると，出産直後より，身近かにその行動が観察出来る哺乳動物である。

「ひと」では出来ない，母子関係の実験・観察を犬でおこない，その考察を試みた。

① 隔離飼育による同胞間のその後の発達経過は，自我の未発達による思春期の問題に直面するわれわれに何等かの示唆をあたえるものと考え，隔離飼育の実験をおこなった。

② 母親の子ばなれは，「ひと」にとって，時には，接触よりも難しい問題であり，障害児，一人っ子，父親不在の母子の母子では深刻な問題でもある。

一般に，子ばなれは動物に見習うべきといわれるが，犬の子ばなれは，一定した時期におこるのか，あるいは，子どもの状態によって，母親の子離れの時期に差があるのか，母親からの子どもへの働きかけなどについて，犬の観察を試みた。

対象犬は，ダルメシアン種母子と，雑種母子で，動物舎で，17〜25頭の犬が生活した。通常，実験動物は，個別ケージを使用するが，群としての行動を観察するために，開放ケージに改造し，動物舎に隣接した土地に運動場をつくった。

群として生活するようになると，犬の中に順位が出来，餌をたべる時，外敵に対する時は，ボスに従って行動するようになった。その後，群の中で，何組かの母子関係が観察された。

〔結　果〕

① 隔離飼育は，ダルメシアン種と，雑種の母子におこなった。犬の離乳は，3週間頃からはじまるのが普通である。もっとも早い隔離飼育は18日目からはじめた。期間は，3週間，3ヶ月，6ヶ月であった。

隔離飼育された子犬と，母犬とともに育った同胞犬の間には，ダルメシアン種，雑種とも，その後の発達経過に明らかな差がみられた。

また，母犬の子犬に対する態度も差があり，3週間の隔離飼育をおこなった子犬に対して，母犬としての保護，保育はまったくみられなかった。

隔離飼育された子犬は，それぞれが群の中で不適応をおこした。孤立，退嬰行動，攻撃性などの症状が認められたが，特に隔離飼育が長期にわたった雑種は，不適応が強くみられた。

隔離飼育時には，ほとんど体重に差がなかったが，1歳3ヶ月になる現在は，長期の隔離飼育をおこなった雑種2頭の間に明らかな体重の差が認められる。隔離飼育犬は，群の中で攻撃され，孤立状態がつづいている。また10ヶ月頃のほぼ成犬に成長したとみられる時期より，弱者の位置にある犬に対する攻撃がみられるようになった。病弱な犬，出産後の衰弱した犬，けんかに負けた犬に対して，執拗な攻撃を加えるようになった。その後，攻撃は，群の中の出生後まもない小犬に向けられ，親のいないすきをみて，4頭の小犬を食殺するという行動を示した。小犬の他犬による食殺は，以前には経験しなかったことである。

一方，親とともに生活した同胞犬は，自己より優位にある犬の威嚇に対して，腹部を示すなど，恭順の姿勢を5ヶ月頃からとり，攻撃を受けることはまったくみられなかった。

弱者，小犬には，むしろ関心を示さず無視して行動しているように観察される。餌争いは，同レベルあるいはやや上位にある犬との間にみられるが，威嚇であり，争いまでに至っていない。現在，群の中で出産し，子犬とともに開放ケージの中での生活をつづけている。

② 母子分離は，普通離乳のはじまる3週間頃

からみられるが，その時期は一定しているとはいえない。母子分離がすすんだ母子であっても，子犬が病気，障害をもつと，母犬は，子犬の食事，排泄を援助するようになる。脱肛をおこした子犬とその母犬であるダルメシアン種の母子に，この母子関係が認められた。

また，子犬の突然死により養育に淡白と考えていた母犬がその3日後に死亡するなど，母犬の対応は，子犬の状態により同一ではなかった。

〔考　察〕

犬の母子関係は，母子のおかれた状態で異なり，時には，母子ともにその影響を受ける。長期の隔離飼育後の子犬は群の中で不適応を示し，欲求不満→攻撃性の発達経過を示唆するものと考えられた。

また，障害犬に対する母犬の養育態度と，子犬の死が誘因と考えられた母犬の死の対応は，母子間の深遠な結びつきに，あらためて反省させられた。母子関係の評価は，単なる測定可能な行動のみでは理解出来ないものがあるだけに，安易な観察は，犬であっても困難である事実を知らされた。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

犬は,「ひと」との生活の歴史が長く,信頼関係が成立すると,出産直後より,身近かにその行動が観察出来る哺乳動物である。

「ひと」では出来ない,母子関係の実験・観察を犬でおこない,その考察を試みた。

①隔離飼育による同胞間のその後の発達経過は,自我の未発達による思春期の問題に直面するわれわれに何等かの示唆をあたえるものと考え,隔離飼育の実験をおこなった。

②母親の子ばなれは,「ひと」にとって,時には,接触よりも難しい問題であり,障害児,一人っ子・父親不在の母子の母子では深刻な問題でもある。

一般に・子ばなれは動物に見習うべきといわれるが,犬の子ばなれは,一定した時期におこるのか,あるいは,子どもの状態によって,母親の子離れの時期に差があるのか,母親からの子どもへの働きかけなどについて,犬の観察を試みた。

対象犬は,ダルメシアン種母子と,雑種母子で,動物舎で,17～25 頭の犬が生活し々通常,実験動物は,個別ケージを使用するが,群としての行動を観察するために,開放ケージに改造し,動物舎に隣接した土地に運動場をつくった。

群として生活するようになると,犬の中に順位が出来,餌をたべる時,外敵に対する時は,ボスに従って行動するようになった。その後,群の中で,何組かの母子関係が観察された。